

7節 オセアニア州

オセアニア州^(*)とは、オーストラリア大陸、ニュージーランド北島、南島を含むポリネシア、ニューギニア島を含むメラネシアとミクロネシアから成る。これらの大陸、島の他は、太平洋の中に点在する小さな島々である。それがオセアニア、大洋の州の由来になっている。そして、この地域の小さな島々は、マレーとポリネシア系の民族による独特の航海術で植民が進み、海洋文化を築き上げてきた。

* 州と大陸の違い 州は歴史や文化という人文的な要素を基準にした区分に対し、大陸は自然地形学的区分

州：大陸の他に周辺の島々をも含める。アジア州、ヨーロッパ州、アフリカ州、北アメリカ州、南アメリカ州、オセアニア州の6州

大陸：ユーラシア大陸（アジア大陸とヨーロッパ大陸に分ける場合が多い）、アフリカ大陸、北アメリカ大陸、南アメリカ大陸、オーストラリア大陸、南極大陸の6（アジアとヨーロッパに分けた場合7）大陸

① オーストラリア（オーストラリア連邦）

季節が北半球と逆

オーストラリアの語源は、ラテン語で「南の大陸」を意味する。ギリシャ時代から「知られざる南の大陸」が存在すると考えられていたことに基づく。イギリス連邦加盟国で国旗の左上にユニオンジャックが描かれイギリスとの結びつきを示し、その下の星は6つの州と特別地域を示し連邦を意味する七稜星。右半分に南十字星を配置し南半球の国を示している。なお、国章にはオーストラリアを代表するカンガルーとエミューが描かれている。この2つの動物は前に進むのみで後に進むことが出来ない。1788年建国の新しい国で「常に前進」の願いを込めたものとされている。

オーストラリアは、西がインド洋、東は太平洋のコーラル海とタスマン海に面している。面積はアラスカとハワイを除くアメリカとほぼ同じだが、7大陸中最



も小さな大陸^(*)である。年中、中緯度高圧帯に覆われているため降水量が極端に少なく「乾燥大陸」と呼ばれている。国土の2/3が年間降水量500mm以下の乾燥帯で、ステップあるいは沙漠気候である。特に高温乾燥の激しい内陸部にはグレートビクトリア、グレートサンディー、シンプソンなどの沙漠が広がっている。また、世界で最も平坦で高度の低い大陸で、平均高度330mで大部分が起伏の少ない台地や平原である。

南半球と北半球の国では、季節が逆になる。オーストラリアの桜は、9月末から10月にかけて見頃になる。12月のクリスマス以降は夏休みに入る。南半球で盛んなラグビーは冬場を中心とするスポーツで、南半球が冬の時には北半球のチームがオセアニアを訪れ、夏には北半球の国々へ遠征する。さらには、季節の逆を利用して、北半球の端境期を利用し野菜、果物などを北半球へ輸出している。

(*) 大陸と島の違いは？

辞書（三省堂国語辞典）によると、大陸「地球上で広大な陸地」、島「四方が水で囲まれた陸地」とあり、区別がはっきりしない。最小大陸のオーストラリアの面積が758万4700㎢で、最大の島グリーンランドの面積は216万6086㎢である。従って、オーストラリアより小さいのが島、グリーンランドより大きいのが大陸となる。但し、規定はない

＜乾燥大陸と水＞

オーストラリア大陸の2/3に河川がなく、水不足と土壌の貧弱さで土地利用も盛ならない。加えて、年毎の降水量の変動が大きく、河川の多くは豪雨の後だけ水が流れる涸れ川、ワジである。河川水は塩分濃度が高く、干上がると塩分が残る。また、湖沼の多くも塩湖である。

水不足を補っているのが被圧地下水を利用した掘り抜き井戸で、有名なのがグレートアーテジアン（大鑽井）盆地である。特に、大陸中央部から東部にかけてのマリーダーリング盆地は、牧羊地としてオーストラリア農牧業で重要な役割を果たしている。特に、良質の羊毛を産するメリノ種、スペインのメセタと呼ばれる乾燥高原が原産で乾燥に強く、環境適応力に優れオーストラリアを羊毛産地にした。また、この盆地は、小麦の産地でも知られる。これはオーストラリアアルプス山脈東側を流れているスノーウィー川上流にダムを造り、その水を山脈の地下を掘ったトンネルで、西側の乾燥地域を流れるマリー川やその支流に水を引く「スノーウィーマウンテンズ計画」による灌漑農業による所が大きい。

乾燥したオーストラリア大陸では、居住地域が限定されてくる。人口の80%は大陸南東部と南西部の海岸から100km以内に住んでいる。居住地域でも年降水量は500～1,200mm程度で、日本の平均年間降水量1,718mmに比べると極端に少ない。

＜余談＞ 水に対する執念を感じさせるものが山形県に2件存在している。しかも、江戸時代の出来事である。

1つは、米沢藩主上杉鷹山公が食糧増産を奨励したが灌漑用水不足から実績が上がらず、家臣黒井忠寄に水利を調べさせた。その結果、飯豊山中で水量の多い荒川の上流玉川の水を、最上川の支流白川に148mの水路を15年かけて切り開いた「穴堰」、別名黒井堰である。現在は使用されていないが、今も昔のままの姿で残っており、山形県の重要文化財の指定を受けている。

もう1つは、蔵王連峰の刈田岳と杉ヶ峰を水源とする宮城県側横川水系の水を県境跨いで山形県上山に灌漑用水を引いた横川堰である。1821年（文政4）、水不足に悩んだ上山藩の奈良崎助左衛門による水源調査に始まる。水源は角田藩で水利権を巡る交渉など親子2代に渡る悲願であった。その後、山形県令三島通庸の後押しを受け宮城県から水利権の許可を得て、1881年（明治14）通水した。その後改修、整備を重ね今も現役で水田を潤している。なお、山岳地帯で県境を越えた灌漑水路としては全国唯一の歴史的、文化的財産で小学校の教材としても取り上げられている。

＜白豪主義から多文化国家へ＞

17～18世紀にかけてヨーロッパから白人が入植するようになる。その後、イギリスの植民地となりイギリス系住民が増加した。オーストラリアは流刑地として知られているが、1860年代末までの移民100万人をこえているが、流刑者は17万弱と少ない。

1850年代のゴールドラッシュ時代に世界中から多くの人々が入ってきた。なかでも低賃金で働く中国人が多数を占めていた。これに反発して、アメリカのように厄介な人種問題を起こさないようにとのことから20世紀初頭有色人種が入ってくることを防ぐため「連邦移民制限法」という

法案が可決された。いわゆる「白豪主義」で、白人の移民だけを受け入れてきた。

第二次世界大戦後、ヨーロッパの人口減と経済復興で白人の移民が減少し始め、国力の基礎となる人口増加が鈍り始めたため 1980 年代から白豪主義を撤廃し、世界から移民受け入れ始めた。80 年代以降世界各地から移民が流入し、特にアジア系移民が増加した。その結果、オーストラリアはアボリジナル ピーブル^(*)、ヨーロッパ系住民、アジア系住民と様々な文化を認め合う多文化社会へと移行した。

オーストラリアは天然資源に恵まれ「ラッキーカンントリー」と言われている。1950 年代は「羊の背中」、60 年代は「鉄鉱石のトラック」、80 年代は「石炭の貨車」に乗り豊富な資源を輸出する「資源立国」の道を行ってきた。

オーストラリアは別名「乾燥大陸」で、人が住むのも植物が育てるのも大変である。この環境下で育てられたのが乾燥に強い羊、メリノ種で、人口の 3 倍強を飼育し、1950 年代には羊毛輸出量が世界 1 になった。輸出先はセーターやカーデガンの発祥地であり需要の高いイギリスであった。この傾向は 20 世紀後半まで続く。

1960 年代以降になると様々な鉱産物の生産、輸出が急増してくる。西部の安定陸塊では鉄鉱



石や金、ダイヤモンド、東部の古期造山帯では石炭、北部の熱帯地域ではボーキサイトを産出している。原油と天然ガスは、タスマニア島との間のバス海峡及びサウスオーストラリア州北部に多く、大陸北西部の沖合の天然ガス開発も進んだ。オーストラリアの総輸出額の 30% 近くが日本向けで、日本は第 1 の貿易相手国となった。鉄、銅、鉛、亜鉛の鉱石、地金、石炭はいずれも日本が輸出先として首位であった。

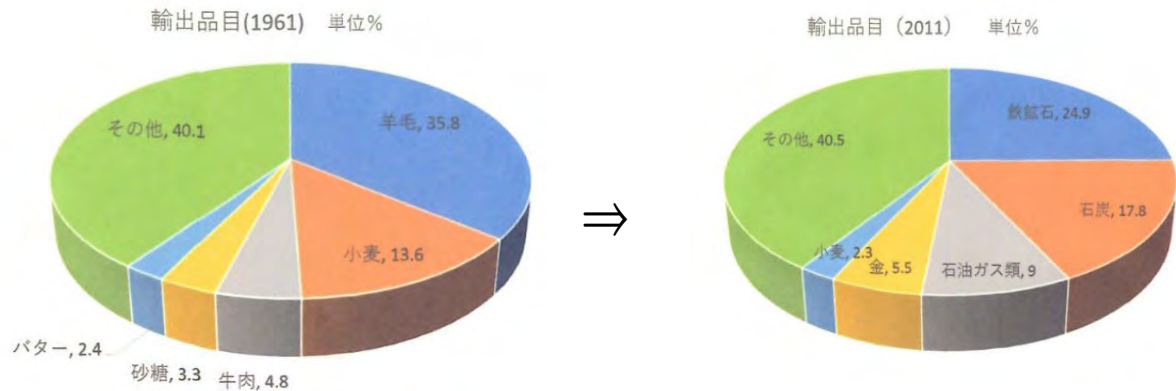
1973 年、イギリスの EU 加盟が、オーストラリアに大きな転換期をもたら

した。これまでオーストラリア政府の目は常に本家のイギリスやヨーロッパに向けられてきたが、アジア太平洋地域へと政策が変更された。すなわち「脱英入亜」である。オーストラリアとイギリスの位置関係は、ほぼ対蹠点、地球の裏側に等しい。これまでの宗主国と植民地という経緯から遠いながらも親戚関係を保ってきたが、距離的に近いアジアに視点を切り替えたのである。

その結果、1964 年頃まで輸出の 1/4 を占めていたイギリスは 1.4% と低下し、2014 年の輸出先の一番手が中国で 36.7%、二番手が日本 18.0% となり、輸出先のおよそ 80% をアジアが占めるようになった。同時に品目も大きく変化してきた。さらに、最近ではアジアの新興工業経済地域（NIEs）を中心とする輸入量が増加していることに加えて、オーストラリア政府の政策で特定国偏在を避ける方針もあり幅広い国々との貿易に変わってきている。

（*）アボリジナル ピーブル アボリジニには差別的な響きが強いことからアボリジナル ピーブルなどが一般的な呼称

オーストラリアの輸出品目の変化



＜東西に広がる国土＞

オーストラリアには、大陸横断鉄道と縦断鉄道が走っている。横断鉄道はシドニーからアデレー経由でパースまで 4,352 km。これは日本最北の稚内駅から最南端の枕崎駅まで鉄道で結んだ距離、3,100 kmより遥かに長い。シベリア鉄道、カナディアン パシフィック鉄道に次いで世界で 3 番目に長い鉄道である。正式名はグレートサザンレールウェイだがインド洋と太平洋を結ぶことから「インディアン パシフィック号」と呼ばれ、3 泊 4 日で走っている。

大陸縦断鉄道はアデレードからアリススプリングス経由でダーウィン間、2,979mを2泊3日で走っている。正式名称はザ アフガン エクスプレスだが、約して「ザ ガン」と呼ばれている。



(左) 大陸横断鉄道 インディアン・パシフィック号のロゴマークはオナガイヌワシ
(右) 大陸縦断鉄道 ザ ガン号のロゴマークは労働者がラクダに乗る姿



＜果物持ち込み禁止の国＞

オーストラリアは入国時のみならず、州ごとにも病虫害対策として果物検査がある。もし、持っているとして没収である。グローバル化の進んだ現代では、害虫や病原菌を締め出すことは不可能に近いが、オーストラリアは病虫害の消毒なしで果物栽培ができる世界唯一の国である。1956 年、メルボルンでオリンピックが開催された時、馬術競技の馬を持ち込むには半年という長期の検疫期間があるため、この競技だけは遠く離れたスウェーデンで開催された。

日本で普段食べているもので世界的にみて美味過ぎるものにリンゴがある。これまで欧米で食べたリンゴは、しゃきとした歯触りがない、甘味が、旨みがない。そのうえ小粒である。オーストラリアのリンゴも同じで、食べ方は欧米同様丸かじりである。

日本の美味しいリンゴは病原菌も虫も大好きである。農薬散布は 20 種類ほどの病害虫を防除対象にして 10 日に 1 回の割で少なくとも 14 回程度行うという。パース発、ウルル経由でアリススプリングス着のブッシュキャンプ、自炊による現地発着ツアーに参加した時のことである。門歯がさし歯で不安定なためがぶりとかじれない。ナイフで 4 つに割って食べているうちに、気が付くと皮をむいていた。これを見たイギリスで働いている 30 代半ばのオーストラリア人が、「ヘー」と言い

ながら皮を食べて、おどけて見せた。消毒浸け国で実るリンゴとそうでない国とでは、食べ方にも違いが現れる。なお、航空路とは関係なく国際線の機内食のバターやチーズはオーストラリア産が圧倒的に多い。これはオーストラリアの食への絶対的な自信と諸外国の信頼の表れといえる。

＜シドニー＞

シドニーはオーストラリア最大の人口 530 万人（2024）で、南半球を代表する都市である。海外出身者が人口の 1/3 を占める国際都市でもある。ユースホステルで一息ついてから、オペラハウスの見えるシドニーコープへ歩き出した。1 つの建造物が街のいや国のシンボルとなっているのは珍しい。加えて、年代的に最も新しい世界遺産となれば一目見ておきたかった。

青い海、木々の深緑を従えて巨大な貝、ヨットの帆が目飛び込んできた。だが、今にも雨が落ちてきそうなどんよりとした空模様は、折角の舞台には似つかわしくなかった。そんな時、目に入ってきたのがオペラハウスと対峙する巨大ながらも優美な曲線のハーバーブリッジであった。大きさに圧倒された後に、目を凝らしてみるとアーチ型の鉄骨の上を登る人の列、降る列が見えた。フェリー桟橋近くで小腹を満たしながら、ウェーターを介して有料でブリッジクライムを楽しめることを知った。単に渡るよりは遥かに興味を覚え、登り口のロックス側パイロンに向かった。

料金 15,000 円に驚いたが、後には引けなかった。ガイドは大柄な女性で、総勢 7 名の即席チームが編成された。出発に当たりアルコールの検査があり、持ち物は全て厳禁、専用のスーツに着替えた。ヘッドホンを固定するフック、トランシーバーを収めるケース、手袋、帽子を止めるフック、更に命綱などなど一寸したロッククライミング並みの出で立ちに早変わりした。

鉄骨のアーチに取り付くまでが大変だった。一旦外に出て曲りくねった鉄骨の間を潜り抜け、漸く風が鳴く鉄骨の上に出た。鉄骨の幅は 1 m 近くもあり、足場が作られていた。傾斜は思いの外緩いが、命綱を掛けるワイヤーと手すりが途切れることなく伸びていた。1 歩 1 歩展望が開けてくるが、トントンと登るだけではなかった。50m 程の距離を登っては、展望を楽しみ、エアホーン越しにガイドの説明に耳を傾けた。最も高くなる中間地点が 134m で、紺色の海面を走る白いヨット、白波を立てて走る高速艇、貝が重なり合ったようなオペラハウスが映えていた。林立する灰色の高層ビルと適度に散らばる緑が港を縁取っていた。ここから世界の美港を見下ろすのだから申し分ない眺めだった。脚下には片側 4 車線、計 8 線を車が流れ、時折ゴーという音と共に電車が過ぎて行



く。そして両脇に歩道があり、歩く人を縫って自転車が通る。その幅 50mである。時間をかけてのんびり、ゆっくりスカイオークを楽しんだ。

入れ替わって、薄暮過ぎに出発する組は、ヘッドランプの点検を入念に繰り返していた。栈橋に降りてきた時、夕闇が迫りライトアップされたオペラハウスが白布のような柔らかさで海上に浮かんでいた。

<インディアン パシフィック号>

正式名称は「グレート サザン レールウェイ」だが、インド洋岸パースと太平洋岸シドニーを結ぶことから「インディアン パシフィック号」の愛称で呼ばれるようになった。いつかは乗ってみたいと思い続けていたインディアン パシフィック号、なけなしのお金をはたいてゴールドクラスにした。真っ赤なカーペットを踏みしめて乗車した。車両ごとにシャワー室があり、寝台は個室。豪華な3食付きに加え、ティー、コーヒーはフリーで 24 時間いつでも飲めた。列車のロゴマークはオナガイヌワシだが、平均時速 85 km、最高でも 115 kmで、日本の新幹線とは比べものにならない。ブロークンヒル、アデレード、クックでは停車中にツアーが組まれていた。



真っ暗闇の中に浮かぶ星を寝床から眺め、地平線から昇る日の出を見て、青い空と赤い大地のコントラストに息を飲む大陸横断鉄道の旅であった。飛行機に比べて運賃は約 4 倍、所要時間は 12～3 倍の贅沢極まりない旅である。

ラウンジ車のテーブルにいつも列車のロゴが入ったレンガ色で紙製コースターがあった。何気なしに裏面を見たら、の質問が印刷されていた。

問1 インディアン パシフィック号はシドニーとパース間を移動します。この旅の距離はいくらですか？

- a) 4,352 km b) 5,552 km c) 4,952 km

問2 インディアン パシフィック号は、世界で最も長い直線の線路でナラボー平原を横断しています。その長さはどれくらいですか？ a) 692 km b) 261 km c) 478 km

問3 インディアン パシフィック号は、大陸横断の旅でいくつの町を通りますか？

- a) 276 b) 556 c) 350

問4 クックの住民は何人ですか？（ヒント：クック駅は交差駅として造られたが、1997 年、民営化で閉鎖された。クックはオーストラリアで最も孤立した町の一つで、次のカルグーリーまでの 862 kmは食べ物も燃料を手に入りません）



問5 インディアン パシフィック号に何名の客が乗車していますか？

a)276 b)350 c)556

(解答：問 1-c, 2-c, 3-c, 4-0人, 5-a)

＜ナラボー平原の中のクック駅＞

インディアン パシフィック号の走るシドニーとパース間の西よりのナラボー平原は、東西 725 km、南北 400 km、面積 20 万km²で日本の本州とほぼ同じ広さである。ナラボーとは、ラテン語で「木がない」という意味で、灰色がかった草と小石原がつづき、所々に高さ 1m 位の灌木が目につく。この平原に 478 km もの直線の線路が延びている。東海道新幹線でいえば東京から米原までの距離、世界で最長の直線区間で 5 時間余りかかる。ナラ

ボー平原に入っているので揺れが少ない。低木、草と大地が見渡す限り続く。人工的なものは何もない荒野だ。ナラボー平原は記録によると、最高気温が 48.5℃、最低気温は 0℃を下回り、植物が茂っているだけに年間の雨量は 250mm ほどあるという。

予定より 1 時間近く遅れてナラボー平原の真ん中、クック駅に停車した。世界 1 直線線路の中間駅前の放置された建物は乾ききって寂れていたが、「クックはナラボーの女王都市」と書かれていた。また、廃屋に打付けられたボードには、「862 km 先のカルグーリーまで食料も燃料もなし」と記されており、まさに陸の孤島であった。

列車の最後部に行き、地平線まで真直ぐ伸びるレールをカメラに収めた。大粒の雨が降ってきた。列車が動き出してから車窓をしばらく濡らし続けたが、流れる風景は少しの変化もなかった。列車は同じ速度でひたすら西に向って走り続けている。

15:30 過ぎ、ブッシュが増え出し、間もなく樹木が姿を現し始めた。世界最長直線線路 478km のナラボー平原の終りだった。前方に台地を思わせるようなボタ山が見えてきた。オイルタンクも見える。カルグーリー到着だった。

憧れ続けてきたインディアン パシフィック号が走るナラボー平原の北に続くグレート ヴィクトリア沙漠にイギリスとオーストラリア両政府の核実験場があった。アデレードの北西 800 km、南オ



車窓から見たナラボー平原



ーストラリア州マラリングアのタラナキ核実験場である。1956～63 年の間に7回、更にこの北のエミューで2回の計9回行われた。先住民族アボリジナル ピープルの土地で、彼らには何の説明もないまま祖先の土地から強制的に移住させられての実験だった。今日では観光地化されているが、長時間の滞在や土地の掘り返しなどは禁止されているという。

<パース>

インディアン パシフィック号の終点パースは世界で最も住みやすい都市、長期滞在希望都市の上位にランクされ、世界を旅した人々からの圧倒的な支持を得ている。確かに、自然と都会が調和した美しい街だ。夏季は晴天続きで、冬季は時には雷雨に見舞われるが総じて穏やかな気候の地中海性気候で住みやすい。治安の良さも手伝っての結果だろう。

パースの語源はスコットランドの地名に由来と陳腐だが、オーストラリアの都市の中で最もイギリス生まれの住民が多いという。パースもシドニーも観光客向けのホテルは高額で手も足も出なかった。宿は気楽なユースホステルのドメトリーにした。オランダ人、イタリア人と一緒になった。1泊 2,300 円位、ランドリーも約 200 円、乾燥機が 20 分で約 85 円と経済的だ。

フードコート内で腰を降ろし、のんびりと通りを見ていると、東洋系の若者の姿が圧倒的に多い。中国、韓国、日本を中心とする東洋人によって遠からず飲み込まれてしまうのでは思える程だった。

現在、パースと南アフリカのケープタウン間に定期航空路が開かれている。アパルトヘイト時代の人々の多くが移住してきたことと関係があるという。

オーストラリアはかつて「白豪主義」といって有色人種の移住を禁じていた。今は撤廃しているが、アジア人が溢れる街の様子はオーストラリア人にどう映っているのか気になった。



<空のF-1>

パースの繁華街へ散策に出かけた。1枚のポスターが目に入った。その気になってみると、至る所に貼られていた。なかには3m×5mと大型のものもある。「レッド ブルー エアーレース」、「空のF-1」とも言われるアクロバット飛行レースだった。しかも、開催日は今日と明日とあった。早速、会場のスワン河に急行した。

リバーサイド ドライブには人垣ができ、出店が立ち並んでいた。プロペラ機二機が急上昇、急降下を繰り返し、接近したり離れたりと慌しく飛び交っていた。対岸には有料の特別観覧席が設けられ、川の中に青と白に塗り分けられたポールが立っていた。色とりどりの小型機が水平飛行から横になったり、ひっくり返ったりしながらポールをくぐり抜けていく。

突然、爆音と共にジェット機が飛来した。腹に響くエンジン音は、小型機何機が束になっても敵わない圧倒的なものだった。眼前で錐揉み状に飛行し、最後は垂直に上昇して視界から消えていった。

アクロバチックな飛行でタイムを競う競技として 2005 年に始まったというが、昨年のブタペスト大会で史上 2 位の 120 万人の観客を動員するまでの急成長したエキサイティングなレースだという。



<ピナクルズ>

パースから北に 250 km、ナンバン国立公園に入ると「うおー！」という驚きの声があがった。黄色い沙漠に奇岩群が林立していた。小回りの利く小型車ということで、大小様々な岩塔の間を縫って奥へ奥へと進んだ。全体を見渡したところで車を降り、ピナクルズ形成過程の説明を聞いた。



ピナクルとは尖塔の意味。原生林の枯木が石灰に覆われた後に、周りの土砂が吹き飛ばされ残ったものだという。しかし、いくら論理的に、科学的に説明されても、現実的に眼前に広がる黄色い砂地からによきによきと突

き出る人の背丈を優に越す岩の異様な光景は、非科学的な豊かな想像力の世界で遊ぶに相応しい世界に思える。事実翼を広げたイーグル、耳をピンと立てたネコ、イルカが飛び上がった姿、ゾウ、天を突く男根などなどの名称が付けられているとなれば、見る人が自分の空想の世界で遊んでいる証でもある。

黄色い砂地に黒い影ができ始める頃、ピナクルズの細い凹凸も鮮明になり始めた。6,500 万年前の形成となれば、恐竜のために神々がつくった荒野の墓標とも言えそうだ。2 時間近くも炎天下で、無機質でへんてこりんな岩の間を彷徨っていた。でも、不思議と飽きることのない千変万化の尖岩群の空間だった。

<ウエーブロック>

パースの市街地を抜けるまで信号、信号で時間をとったが、郊外に出ると見渡す限りの小麦畑と牧草地が広がっていた。冬季のわずかな降雨を頼りに小麦を栽培している。いや、小麦以外は栽培できないところである。

途中の小麦畑の中にドッグ セメタリーがあった。1974 年にストライクというイヌの墓地の周りに、墓がつくられ続け今日の規模になったという。小麦栽培以前、牧場の家族と一緒に羊を追っていたイヌが毒蛇に咬まれるなどの不慮の事故、あるいは天寿をまっとうしたイヌたちの墓だった。

屋下がりハイデン ロック、通称ウエーブ ロックに着いた。高さ 15m もあろうか、先端部は大きく迫り出している。幅 100m 余の大波が、瞬時に固まったかのようだ。黙って見上げるしかなかった。岩は赤い花崗岩で侵食がすすみ表面が剥がれるところもあり、岩肌には縦に何本もの縞模様がついていた。

ガイドから生成過程の説明があった。数十億年の長い歳月をかけて、かつての内陸海の打寄せる波、その後の雨と砂を伴った風による浸食で形成されたという。そして、縦についた縞模様は、岩肌を流れ落ちる雨水の沈殿物によるものだという。理論的には、確かにその通りだと思う。しかし、ピナクルズ同様自然界には、計りかねる力と時間がある。そして、人間の想像を遥かに凌駕する光景



を目の当たりにしたとき、神の存在を素直に信じたくなる。

ウエーブ ロック右手端から上に登ってみた。途中にダムがあり、水が溢れていた。1928 年、初期の開拓移民のため造られたものを、ハイデンの住民のために貯水量を増やす工事をしたという。足元は赤い花崗岩の巨大な 1 枚岩であり、その先端部がウエーブ ロックだった。帰路は、ただひたすらパースを目指し雨の中を走り続けた。

パースからアリススプリングへの車の旅

<大陸横断仕様車>

パース発、オルガ岩群、ウルル経由アリススプリングス着の 4WD 車による現地発着ツアーの車は、分厚い鉄板で出来ていた。ウルルでは全員が車の屋根に直接登って日没、日の出を眺めた。車の



前にはバンパーを保護するかのよう太い鉄製のパイプで覆っていた。乗車口のステップは、厚さ 1 cm もある鉄板だった。日本の乗用車に比べれば戦車である。通信手段が未発達だった頃、大型動物と衝突し車が走れなくなると命とりであった時代の名残だという。オーストラリア人のガイド兼ドライバーを含めて 7ヶ国、10 名で、大地にごろ寝のブッシュキャンプしながら 5 泊 6 日の旅であった。未舗装道路が赤い大地の地平線の彼方まで伸びていた。そして、思い出したようにロードハウスが現れ、簡単な買物、場所によっては宿泊も可能であった。



しかし、私たちの宿泊地は、車でブッシュに分け入り、物質文明からは隔絶された別天地であった。枯木集め、食事の準備をし、トイレの穴掘りが日課であった。雲の浮かぶ天蓋がオレンジ色から赤へと変化し、地上の万物を染めながら日没を迎える。スワッグといわれる帆布の封筒形寝袋に入ると、大地がベッドで、降り注ぐような星空が天井であった。

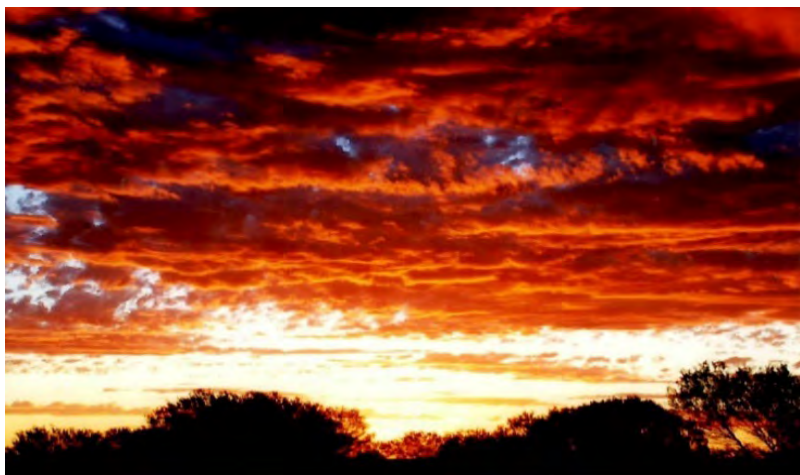
<ブッシュキャンプ>

今回のツアーを決めた時、地図帳を開いてみた。カルグーリーを過ぎるまでは「道路」が記入されているが、その先は、アリススプリングスまで未記入であった。一方、ガイドブックの地図には、主要国道以外の道路として細い線、グレートセントラルロードが記され、ウルルからは主要国道としてアリススプリングスへと繋がっている。それで、道路が無いことはないだろうが、宿泊施設、水やスナック類などは望むべくもないものと思っていた。ところが、道路沿いに 100 km 間隔位で「ロードハウス」なるものがあり、買物は勿論、場所によっては宿泊も可能で、ブッシュキャンプに頼らざるを得ないコースではなかった。

今夜の根倉には広場があり、中央に石で囲んだ炉の跡があった。枯れ木集めに散っていった人々が、ユーカリの木々を引き摺って戻ってきた。小枝を集め火を起こした。西の空がオレンジ色から赤と変化しながら日没を迎える頃を待って夕食の準備が始まる。

今回のメンバーは初老のドイツ人カップル、イギリス人男女それぞれ1名、オランダ人女性1名、スイス在住のインド人女性1名、イタリア人男性1名、日本人男性2名で、平均年齢40代後半位だろうか。

寝る所は赤土の大地、天井は星空。寝具はスワッグ、オーストラリアン ベッド ロールといわれる



もので、マットごと帆布の封筒形寝袋カバーであった。これに各自の寝袋で寝るのだから下手なベッドよりは遥かに寝心地が良い。枕元に靴が収まり、ファスナーを閉めると頭ごとすっぽりと帆布の中に入ってしまう。これならサソリの針も通らない。深夜、雷鳴と共に大粒の雨が帆布を叩いたが、封筒形の包みはみな無反応だった。

<ハエ王国>

オーストラリアを旅していると、どこでもハエの攻撃にあう。その数は、日本では経験できない。目、口元へとへばりつくしつこさである。こんなに多くのハエを見たのはインドの田舎の旅以来であった。元々オーストラリアにはハエは生息していなかったという。ヨーロッパ人が連れてきた牛とともに持ち込まれ、繁殖に適した気候ということもあり、瞬く間に全土に広まったという。

車両の後に水と食料、鍋釜類を積んだ車を牽引していた。夕食の準備が始まると、牽引車の後方が調理台に早代わりする。ガスコンロでスパゲティーミートソースづくりが始まった。挽肉の香りが広がると、ハエが集ってきた。ソースの入った鍋の回りはハエで埋め尽くされ、羽で銀色に光っていた。蓋を取ると何重にもなって響く羽音に身震いが出た。

<ゴーストタウン>

点在するユーカリの一種ガムツリーと背の低いブッシュの間に伸びる直線道路を、時速100～110 kmで突っ走る。10時前、レオノラに着く。かつて金鉱山で働く人々の町だったが、60年前からゴーストタウンになってしまったという。

錆付いた車が朽ち果てた家の前に止まり、家の中のベッドには人形が横たわっていた。病院らしきところには、ピアノがあり、机の上の治療機器が散らばっていた。鍛冶屋、自動車修理工場もカフェも、一見してそれと解かる様に立ち並んでいた。淋しすぎる光景だったが、集落の外れに花壇があった。砂埃をかぶったサボテンが棘とげの葉に鮮やかな色彩で花を咲かせていた。その先にシックな色合いのホテルが近日の開業を待つかのように建っていた。

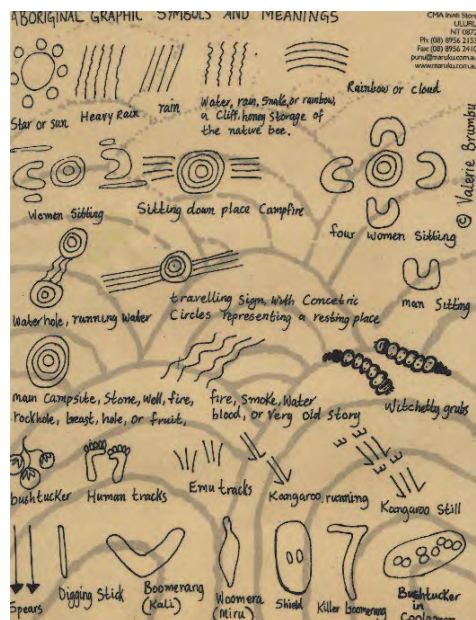


ガムツリーを切り倒し、赤土の台地を踏み固めただけの道路を走りだした。思い出したように対向車が来るが、思いの外砂埃が舞い上がらない。パタゴニアのように煙幕を張ったように砂埃を舞い上げ、2～3日は空中に漂うのでは思えたのとは大違いだった。

＜アボリジナル ピープル テリトリー＞

オーストラリア先住民アボリジナル ピープルは、およそ6万年前の第4氷河期の中頃に東南アジアから移動してきたとされている。オーストラリア全土で狩猟採取による生活、自然の恵みが生活の糧となっていたことから、彼ら独特の世界観を持っていたとされている。その中心となっているのが人間も自然の一部と認識し、動物や植物も一体で共存するための知恵や生活習慣を生み出したとされている。文字を持たなかったため歌や踊り、ロックアートなどで表現し、文化や伝統を数千年にわたり継承してきた。最盛期には全土に25～30万人で暮らしていたという。

彼らのテリトリーに入った。写真はご法度で、人間だけでなく風景も駄目の注意があった。今日大半のアボリジナルピープルは、政府の保護下にあって生活費が支給され、働かなくても最低の生活ができる。そればかりか、子ども達は義務教育を受けることも可能と聞いた。



アボリジナル ピープルの記号、絵文字



アボリジナル ピープルの記念品（左と上）とアート



集落に近づくと、緑地に座り、寝そべり、虚ろに空を眺め、お喋り、昼間からアルコールを呼ぶ姿が目に入ってきた。また、彼らが運転する車にも出会った。どの車も競っているかのように多くの人を乗せ、ナンバープレートは9割以上付いていない。勿論、遠出などできる代物ではないから、自分たちの縄張り内を乗り回しているのだろう。道路脇に鉄の残骸と化した車を、ぽつんぽつんだが何台となく目撃してきた。こままの状態が続けば、収拾つかなくなるのではと思えるほどの数だった。

アボリジナル ピープルの若者達が社会に出るとき、職を得るとき、どの程度の平等が保障されているのか。そして、どれ位の人々がどんな職を得ているのかと考えてしまった。

＜カタジュタ（オルガ岩群）とウルル＞

道路は、心もち凹凸が増えてきた感じだが、一直線の赤土の道路が続く。そして、遙か前方に巨岩がごろごろと重なり合うのが見えてきた。道路のアップダウンで見え隠れするが、次第に大きくなり迫力が増してきた。カタジュタ、オルガ岩群だ。

沙漠の中に群立する岩山は、外敵から身を守るために肩を寄せ合っているようにも見える。近づいて見ると、平坦な沙漠の中にむくむくと隆起したような岩山の一群だった。どの山の表面も、浸食によって丸くなっている。最も高いのがオルガ山で、比高 460m、海拔 1070m だという。広く知られるようになったのは、1872 年オーストラリア人エルネスト ギレス氏によるが、当初「スペインの女王」と名付けられたという。これに対して、原住民のアボリジナルは「頂上がたくさんある山」という意味で、カタジュタと呼んでいたというから、わが国の北海道で意味のあるアイヌ語の地名を、発音だけで漢字を当てたのに似ている。

説明文によると何億年も前にできた礫岩層が、地殻変動によって褶曲しながら隆起したものとあった。45 km離れたウルルも同じ成因で、「島状丘」と呼ばれている。その後、気候の変動による湿潤と乾燥した気候が繰り返し、風や水による浸食作用で、現在の山容ができたという。

二つの巨岩の間に形成された風の谷に入った。沙漠にいることを忘れさせる空間で、植物が生え、岩山に彩を添えていた。圧倒的な大きさと特異な美しさは、アボリジナルの社会に伝説を生み、共同生活の社会規範となって今日まで続いているという。そして、対峙するようにウルルが望まれた。遠いながらも赤みを帯びた岩肌と圧倒的な存在感で鎮座していた。

車はエアーズロックリゾートに着いた。これまでの大地を切り拓いたままの未舗装道路を走り、荒野の開けたところを間借りして自分たちだけのキャンプとは余りにも違うところに出てきた感じだ。人も、車も多い。そして、建物があり、緑が生茂っている。キャンプサイトは、トイレ、シャワー完備、当然ながら電気も通っていた。

時間を見計らって、ウルルのサンセットビューポイントにむかった。大型バス、乗用車が続々とやってくる。多くのツアーバスは、テーブルを出しシャンパン、ご馳走を並べ始めていた。私達 9 名は車の上に腰を降ろし、高いところからの眺めを楽しんだ。キャンプ 4 日目ともなると仲間との会話も弾んだ。

ウルルは長石の多い砂岩からできているので、全体的に赤味を帯び、陽光の角度によって岩の色が変化するので知られている。薄茶色から段々と力強い赤に染まり、濃褐色から黄緑色、そして紫色から黒い岩山への七変化を堪能した。

夕食後は 4 日ぶりのシャワーですっきりした。そして、自分の匂いの染み込んだ寝袋に潜り、赤土の大地を敷布団に寝ころんだ。今夜も降るような星空だ。



2 日の出の 5:38 に備えて、5:00 前に宿泊地を後にした。目指すはサンライズビューポイント

トだ。ウルルを一周する路上なので、昨夕よりも混みあってきた。たちまち人垣ができた。うごめく人間をよそに、ウルルは闇に溶け込み密かな息づかいだけが伝わってくるようだ。そして、空の明るさに比例して岩肌が赤味を帯びだし、刻一刻と鮮やかな赤に染まり始め、躍動する一瞬を迎えた。

荘厳なオブジェを、見たままの一瞬、ひとコマをカメラで切り取ろうと思ってカメラを構えてみたが、これは不可能だった。冷静になってみると、神が創ったものを、人間が写し取るなど、考えただけで思い上がりが甚だしいと言わざるを得ない。これまでヒマラヤを初めとする白い山なみの広がりや神々しさ、ラップランドで見たオーロラの色彩と動き、南極で見た氷河の迫力、ルプアルハリ沙漠の暑さと乾燥、パタゴニアを吹き抜ける寒風と空気の重さなどなどで、人間が作っただけに精巧なカメラをもってしても単なる記録を残すに過ぎなかったのを思い出した。

日の出と共にクモの子を散らすように、瞬時にして人垣は消えてしまった。本来の落ち着きを取り戻したウルルは、静かに眠りについたのか、岩肌の色の变化も止まってしまった。路上に停車したままの車の上で朝食をとった。



世界最大の一枚岩は、アボリジナルの間では「ウルル」だったが、1873年、ウィリアム ゴースによって世に紹介され「エアーズロック」の名がつけられた。しかし、国立公園として先住民、アボリジナルから借り受けていることから、彼らの代々の呼び名である「ウルル」に正式に1993年に変更された。

ウルルは古生代の初め頃、海の底に水平に堆積した地層が、その後の地変動を受けて隆起したものだが、地層がほとんど垂直に立っていた。周囲9km、比高340m、海拔867mとなっているが、かつてはもっと大きな山であったのが、長い間に風や雨によって浸食され、今日のような岩山になったという。

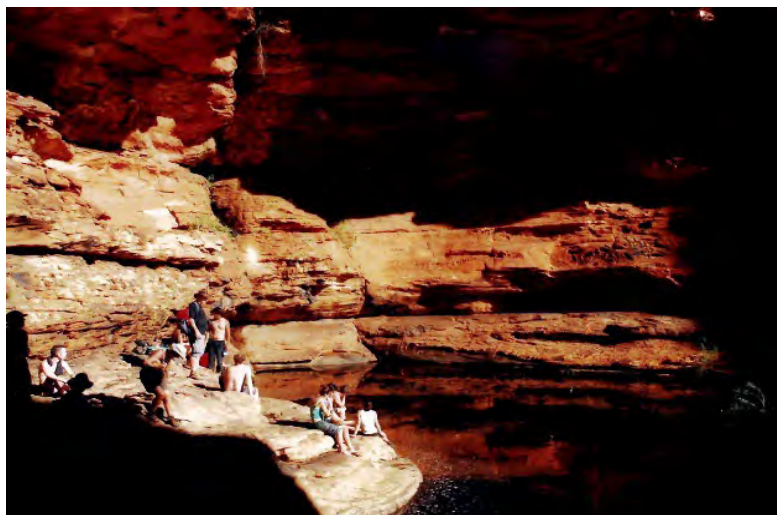
ウルルの東端から南裾野を歩き始めた。見上げる岩肌には、蜂の巣のような細かい空洞がたくさん見られた。風が吹けば複雑な音を発するという。また、雨が降れば滝となって流れ落ちると聞いた。これらの変化を、神のお告げとアボリジナルは一喜一憂したという。彼らの住んでいたと見られる洞窟がたくさんあった。その内部の壁面に、絵や絵文字が描かれている。人間の生命は同心円で表現され、木は家系を意味し、トカゲやカンガルーは人間の再生を意味していると聞いた。当時の人々の生活様子を無言のうちに語り伝えていた。

3時間の散策を終え、キングズ クリーク ステーションにむかった。途中、オルガ岩群、一枚岩のウルルそしてもう一つが巨大なテーブルマウンテインのアティラが見えた。アティラは前の2つに比べて少しも見劣りしない規模ながら、手元の資料には1行も出てこない。ひょっとすると、現在でもアボリジナルの聖地で、単なる物見遊山とは一線を画しているのだろうか。

リーダーから、ウルルで大分歩いたのでキングズキャニオン、ワタルカを明日にするか、それとも今日にするかの問があった。全員一致で「今日」となった。当然、峡谷の周囲を歩く6km、3時間コースである。岩山の登り降りなので出発前、水や履物チェックがあった。早速急坂が始まった。

やっと調子が出始める頃になると歩みが止まり、お喋りかガイドの説明タイムが3度ばかり続いた。ジョージシル山脈の一部が浸食されたとあるが、日本の感覚からすると丘陵といった感じ。此处に深さ270mにも達する峡谷があるから驚きた。

山頂部に登りきると、ダム湖のような窪地があった。ここに大昔の海岸砂丘を示す説明があり、風紋の化石が広がっていた。山全体が頁岩だが、岩肌は明るいクリーム色から濃紫色までと変化に富んでいた。中間地点でコースは、階段を伝って峡谷に降りた。岩ばかりの谷間に水が流れ、樹木が茂っていた。コースを逸れ、「エデンの園」へと進んだ。峡谷の先端部から集った雨水が峡谷を流れ、ぽっかりと空に向けて開けた空間に木が茂り、天然のプールができていた。芋の子を洗うかのよう



ように泳ぐ人々に年齢や性別は関係なかった。周遊コースに戻り、垂直に切立った壁やドーム状に風化した岩肌を眺め、時にはイグアナを探しながら周遊を終えた。

キングズクリークステーションのテント場は大賑わいだった。隣は、大型バス横付けで、2人用のテントが幾つも建ち並んでいた。私たちはいつもの如く火起こしから始まった。石で囲まれた大きな炉があり、薪もふんだんに用意されていた。夕食は、1つの鍋でポテトとニンジン蒸し焼きにして、マッシュポテトを作り、他の鍋のシチューを添えて食べた。

＜田舎のミックスグリルとカンガルーの尻尾＞

パース発、アリス スプリングス着 Desert Explorer 5泊6日のブッシュキャンプの旅が終わった。夜のお別れ会にみんな着飾って参加した。イギリスのおっちゃんにはピカピカの皮靴に履き替えているのを見て「靴文化」の違いを実感した。料理のオーダーになった時、「田舎のミックスグリルの」推薦があった。内容はガーリックマッシュルームとバッファロー、ラクダの焼肉、カンガルーのフィレ、エミューのソーセージ、ワニの肉団子にリチクアンドンソース添えて26A\$=約1,500円だった。調理の仕方や香辛料にもよるだろうが、最も美味かったのがエミュー、続いてクロコダイル、バッファローとキャメルはパサパサしており、これといった味がなかった。

旅の途中、何回かロードハウスに立ち寄った。内部は、スーパーマーケットというよりは、田舎の小さな量販店の感じだった。冷凍庫にカンガルーの尻尾が20本近く入っていた。ガイドが私たちのために1本買い求めた。

尻尾を熾き火にのせた。毛が焼けた頃を見計らって、ナイフで丁寧に焦げた毛を落とした。再び、熾き火に皮付きのままのせた。2、3回ひっくり返した後、取りあげ、粗熱を取った。キッチンペーパーの上から両手で1関節をちぎりとった。焼けた皮を剥ぎ、そのままかぶりついた。香辛料も調味料も一切使っていない。脂がペーパーにグショと染みてきた。ゼラチンが口に広がった。これがアボリジニ流食べ方なのだろうか?!肉は思いの外柔らかく、牛の尻尾に比べ桁外れに多い。3関節残っていたがお代わりする人は居なかった。



両手をウェットティッシュで丁寧に拭いて寝袋に入った。しかし、手から寝袋内部に広がった脂の匂いは、耐え難いもので眠れる状態ではなかった。大切な水を流しながら手を洗い、仕切り直して寝袋にもぐった。

<出会えた動物たち>

オーストラリア大陸には驚くほど多くの動物が生息している。しかも毎年新種の生物が発見されているという。日本の固有種は130種、ガラパゴスは110種に対してオーストラリアは哺乳類、爬虫類、両生類、鳥類だけで1,350種と抜群の多さである。しかも、哺乳類の83%、爬虫類の89%、両生類93%、鳥類46%が固有種だというから、他所の土地では見られないユニークな動物が多く生息しているのが特徴である。その最大の理由は、地理的に隔離されているので外敵の侵入がないので種の絶滅が少なく、多様な環境に適応した結果といえる。そして何よりも人間が少なかったことが大きな理由と言える。

*カンガルー

パース発着ピナクルツアーの帰路にカンガルーファームに立ち寄った。カンガルーに近づくとハエがわんさと寄ってきた。カンガルーはオーストラリアのシンボルであり、後ずさりすることができない特徴から、「前進あるのみ」の期待をこめて国章にも描かれている。



オーストラリアではカンガルーを略してルー、Rooと呼んでいた。有袋類の代表であり、人口の倍の5,000万頭が生息しているという。最も大きいのがアカカンガルーで、時速70kmで走り、1日で100kmも移動するという。光に集まる性質を持つので車との衝突がしばしばみられることから特殊バンパー、ルーバー、Roo Barを取り付けている車をよく見かけた。

年間300万頭狩猟し、肉は国内消費のほか55カ国に輸出している。肉は脂肪が少なく赤身で高蛋白だという。パースとアリススプリングスで2回食する機会があった。ジビエ特有の匂いはなく、硬くもなく結構おいしく食べられた。皮は軽くてしなやかで丈夫なことから国内外のスポーツ会社が競ってサッカースパイクなどスポーツシューズに利用している。

*エミュー

パースからアリススプリングスへの途中、車からブッシュに逃げ込むエミュー姿を目撃した。カンガルーと並んで国章に描かれている国鳥でもある。オーストラリアを代表する鳥で、ダチョウに次いで2番目に大きな鳥だが、走鳥類で飛ぶことができず2足歩行する。

何万年もの間寒暖差の大きい過酷な環境の沙漠で生き延びてきた生命力の強い動物である。野生の動物は外傷が悪化し命を落とすことが多いが、エミューは皮膚の再生力が早いことが知られている。アボリジナルピープルは傷や火傷、打撲や関節痛など炎症鎮痛に、皮膚炎などの万能薬としてエミューの脂を昔から利用していたという。

農地を荒らす害鳥のため駆除対象になっているが生息数は安定しているという。肉はダチョウ同様高蛋白、低カロリー、鉄分を多く含み、しかも臭味やくせもなく、ソーセージともども美味しい一言に尽きる。皮は羽根を抜いた後の軸痕の突起も少なく平らで柔らかいという。ダチョウ皮と同じように使い込むほど艶が増すことから靴、バック、手袋などに利用されている。卵はアボガドに似た深緑色で、卵のイメージから程遠い。大きさは10 cmほどで鶏卵のおよそ6倍、食味は鶏卵と変わりなかった。

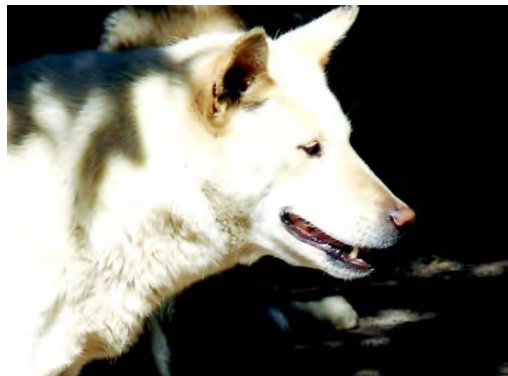


*ディンゴ

ブッシュキャンプを出発しようとした時、ブッシュ越しに私たちを眺めていた。思わず「イヌ！」と叫んだが、ガイドから「ディンゴ」だと教えられた。タイリクオオカミの亜種で、広義でいうと野犬の一種、ワイルドドッグということになるようだ。イヌとの異種交配が可能ということで、多くは犬の血が入っているという。

飼育している動物や家畜にとって脅威と考えられ駆除対象にしている地域がある一方、野良ネコやキツネなどの繁殖を抑え、草食動物の数を抑えるのに役立っていると絶滅危惧される種として保護している地域もあると聞いた。

2019年11月、大陸南東部のビクトリア州で、背中に傷のある子イヌを保護し、後でDNA鑑定した結果珍しいディンゴの純血種であることが判明したと報じられて



パソコン オーストラリアディンゴ基金提供(C)AFP PHOTOのディンゴ純血種画像(右)いた。

*モロクトカゲ

ピナクルへのツアーの折、岩の上で見かけた。明るいエンジ色と黄色、とげとげの姿に驚いた。モロクは古代中東の人身御供の神モロクを思わせることに由来するという。

全身の皮膚に細い溝があり、水分が口に流れるようになってい



る。見た目は恐ろしいが性格は至っておとなしくペットとしての人気が高いという。オーストラリア固有種で輸出は厳しく規制の対象になっている。

*コアラ

カンガルーと並んでオーストラリアを代表する動物である。カンガルーファームで飼育されていた。この世に生を受けながら水の美味さを知ることもなく、ユーカリの葉だけを食し、食事以外の大半の時間1日の18～21時間も寝て過ごす。何かもったいない気がする。コアラとの対面はカンガルーファームだった。



樹上で過ごすため鋭い爪を持ち、親指に相当する指が2本で、残りの3本指と対をなしている。この特殊な構造が強い握力を生み、眠っていても落ちこちることはないという。このような指の配列の動物は他にはいないという。

*ウオンバット

パースからアリススプリングスへのツアーのガイド兼ドライバーが、ザックの上にウオンバットの縫ぐるみを括り付けていた。大きな鼻と丸みを帯びた体形、近親感を覚える愛嬌のある顔でよたよた歩きは動く縫ぐるみであった（写真左）（写真右：レストラン案内）。性格は温和で人懐こい。コアラと同じく有袋類であるが、袋の口は下に向かって開いている。夜行性で木登りはせず、日中はトンネル状の巣穴で過ごす。巣穴を掘る草食動物であることから畜産業の妨げとなり害獣に指定されたこともあったが、今はほとんどの地域、州で保護対象になっている。



*マツカサトカゲ

始めてみた時「ツチノコ！」の言葉が漏れた。ツチノコは日本に生息すると言われている未確認動物、UMA（*）の1つである。外見の特徴から、飼育されていたマツカサトカゲが逃げ出し野生化したのがツチノコとのうわさがある。30 cmほどのずんぐりむっくりの胴体に短く小さな手足が付いている。体の背面はコブ状の突起物に覆われており、先が2つに分かれた真っ青な舌で迫力満点のトカゲである。動作が鈍いことがペットとして人気があるという。



（*）ユーマ「謎の未確認動物」。日本人による造語 Unidentified Mysterious Animal の頭文字をとったもの

*ラクダ

ラクダと言えば、シルクロードの沙漠ルート、中東や北アフリカの沙漠のイメージが強いが、オーストラリアで野生のラクダに出会える。内陸部に広がる沙漠の人口希薄地域、アウトバックを中心に100万頭以上が生息しており、野生ラクダとしては世界最大数と言われている。

18 世紀後半からイギリスによる植民地化が進むにつれて内陸部へ居住地、交通網を広げていった。乾燥した土地への電柱、鉄道の枕木などの長距離輸送のため 1870 年～1920 年にかけてアラビア半島、インド、アフガニスタンからラクダ 2 万頭を輸入した。1930 年代になると鉄道や自動車に代わり、ラクダは野に放され野生化した。その後、増え続け 2009 年以降だけで 16 万頭を駆除している。その一方で、飼育しミルクで乳製品を生産している農場もあるという。



中東ではラクダ肉を常食しているが、見た目は赤身、脂身とも牛肉そっくり。臭味などはないが個人的にはばさばさした食感の思い出が残っている。

*エリマキトカゲ

見かけることはなかったが、20 世紀後半、日本の自動車会社の CM で一時大流行した馴染みの動物である。後脚で立ち上がり、黄色い口を開き、首の部分の周りに翼を広げ、足を左右に広げて走る姿が瞬に焼き付いている。体長は全長 60～90 cmだが、尻尾の長さが全体の 2/3 を占める。危険を感じると首の部分にあるエリマキ状の皮膚を広げて逃げ去る。



2 セントコイン

<日本とオーストラリアの間には…>

オーストラリアと日本の関係を貿易面から見ると、輸出では中国に次いで 2 番目、輸入では中国、アメリカに次いで 3 番目の相手国である。また、日本からは 50 万人近くの観光客がオーストラリアを訪れているし、冬のニセコスキー場にはオーストラリア人で溢れている。

このように経済的なつながりは深いのだが、太平洋戦争勃発直後から日本軍はオーストラリア北部の都市ダーウィンを爆撃し、人口 5,000 人の町で 240 名以上が死亡した。また、1942 年 2 月、シンガポール陥落により日本軍の捕虜となったオーストラリア兵士たちは 3 年半に渡って収容所生活と、泰緬、タイ・ビルマ鉄道建設の重労働を強いられた。この間の捕虜の死者は 8,000 人で、捕虜総数の約 38%であった。シドニー湾では日本の潜水艦による攻撃があった。

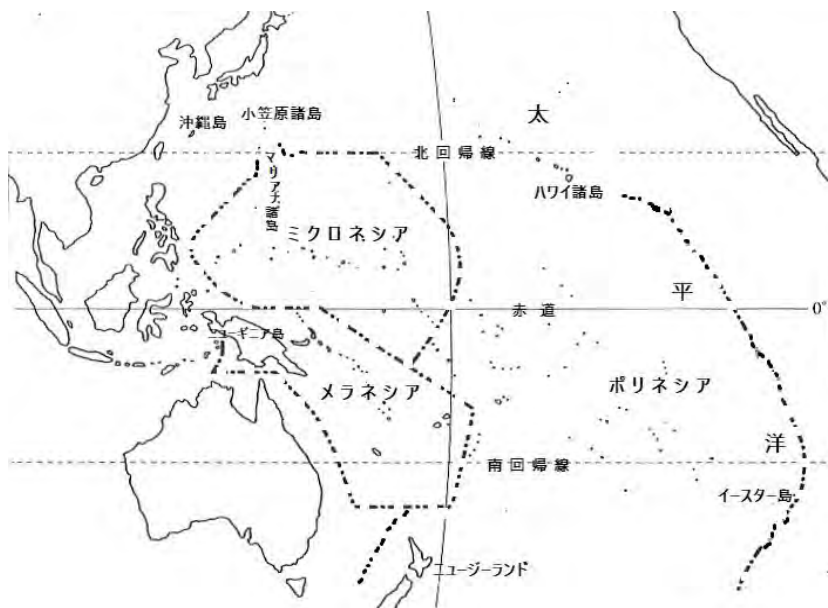
オーストラリアから見た日本は、唯一自分達を攻撃し、多数の死者を出した国なのである。今でもその恐怖や不信感を完全に払拭しているとは思えない。オーストラリアに行くときは、過去の不幸な出来事を忘れてはならない。

② 太平洋の島々

地球表面積の約 1/3 を占める太平洋には 25,000 の島々が点在している。それらを 19 世紀半ば頃から身体的特徴や言語の共通性などを目安にミクロネシア、メラネシア、ポリネシアの 3 つのブロックに分けている。

どの島も小島ということで巨大な王権は発達しなかったが、ポンペイ島のナンマドール、イースター島のモアイ、マリアナ諸島のラッテストーンなどかつて栄えた巨石文化が名残を留めている。

また、南国の原色で色鮮やかな花や果物、自然のリズムに沿った素朴な生活に憧れる人々にとっては「南洋の楽園」として知られるようになり、19 世紀後半にフランス人画家ゴーギャンはタヒチに、イギリスの作家で「宝島」の著者、スティーブンソンはサモアに、さらにはゴーギャンに憧れて土方 久功(*)が 1929 年パラオに移住したことが知られている。



(*) 土方久功 (ビザカ ヒカサ 1900~1977) 彫刻家、民俗学者。南洋の原始の美に惚れ込み、文字をもたず神話や伝説を伝えるストーリーボード、木彫りの彫刻を後世に伝え残した

1) ミクロネシア (小さな島々)

概ね赤道から北緯 23 度、東経 130 度から 180 度の範囲にある島々の総称で、北西部のマリアナ諸島から西側は火山島、東側は隆起サンゴ礁の島々に大別できる。

第一次世界大戦前はスペイン、ドイツが統治していたが、その後は日本が「南洋諸島」と称して委任統治していた。第二次世界大戦後はアメリカの信託統治となったが、経済発展や開発より先に原水爆実験場となった歴史があり、ビキニ環礁での水爆実験では日本の第五福龍丸が被爆(1954 年)した。

1968 年ナウルの独立を皮切りにキリバス(*), パラオ、ミクロネシア、マーシャル諸島が独立した。他にアメリカ領の北マリアナ諸島、グアム、ウェーク島などと共に日本の小笠原諸島も含まれる。 (*) ポリネシアに入ることもあるが国民の 98%がミクロネシア系住民

＜ミクロネシアの小笠原諸島＞

小笠原諸島は火山活動でできた海洋島である。マリアナ島弧の一部で、日本では唯一オセアニア区に属する。発見は 1543 年スペイン船、その後オランダ、イギリス、ロシア船と続く。今日でこそ日本領だが、記録に残る最初の入植者は、1830 年ハワイから来た人たちだった。19 世紀になるとイギリスとアメリカが、捕鯨基地として興味を示し始め、ペリー提督も浦賀に来る前に寄港している。1876 年に明治政府が日本領を宣言し日本領となり、太平洋戦争時には旧日本軍の拠点となった。戦後はアメリカ軍の統治下に置かれたが 1968 年に返還され、1979 年村政確立し現在に至っている。

小笠原諸島の生活文化は欧米、ポリネシアに日本文化も加わり世界でも独特なものを形成してい

る。例えば、島ことばは英語、ポリネシアの言語に八丈島や本土の言葉が入り混じり、現在でも地名や植物名に古称が残っているという。島に伝わる踊りやタコノキの葉を加工して材料にした編物細工、食文化のウミガメ食などにはハワイをはじめポリネシア文化を反映している。



母島で拾った貝二つ

<マイマイ天国>

1979 年夏、東京から 1,000 km の父島二見港へ、船を乗り換えて 50 km 先の母島へ向かった。途中、カツオ鳥が飛び交い、群青色の海にはトビウオの姿が見えた。みるみる曇り始めスコールが過ぎ去った。鮫ヶ崎を回って沖港に入ったが、アリアケカズラが黄色い大輪の花を咲かせ、バナナの葉が風に揺れていた。ここはミクロネシアに属する亜熱帯である。お世話になる知人宅に向かって歩き出した途端、至る所にマイマイがうごめいていた。車に押しつぶされた死骸群は悪臭を放っていた。特に、真新しいコンクリートの壁はマイマイに覆われていた。

知人宅での夜、家主の友人 2 名、島で 4 カ月土木作業員として働き、残りの 8 カ月はタイで過ごしている M さん、島で獣医をしながら農業をしている K さんも加わり、マイマイ談義が始まった。アフリカマイマイは、名前の通り元々は東アフリカに生息していたのを食用目的で持ち込まれたもので、食べなくなった途端に繁殖しだしたという。マイマイは美食家で、スイカもメロンも美味しいものから食べるという。

農作物の害虫であるマイマイ駆除は、ナメクジと同じく塩をまけば縮んでしまうが、その後の塩害が心配で駄目。防除薬のナメトックスを置いてもスコールで流されてしまい効果は期待できない。大量に捕ってカルシウムの殻と乾燥肉を鶏の餌にとも考えたが採算が合わない。残るは人間の欲、数知れない種を絶滅させてきた食欲にかかれば解決できるという結論に達した。

タイにはマイマイの缶詰があるし、フランスにはエスカルゴ料理がある。食材のカタツムリは、飼料を与えて養殖したものを用いている。時にはアフリカマイマイを代用品として用いることもあるというが、野生の場合は数日間絶食させるか、餌を与えて消化管に残っているものを排泄させてから用いているという。エスカルゴを複数回食べたことがあるが、ニンニクとバターの香りと味の記憶だけである。

【資料】近年、父島でマイマイの天敵ニューギニアヤリガタリクウスムシが繁殖し、以前のようにマイマイを見かけなくなったという。半面、島固有のカタツムリ類をも捕食するので新たな問題が発生していると耳にした

<母島>

母島の緩傾斜地に立ち並び 90 戸の都営住宅が目立った。2DK 二世帯一緒のモルタル造りの規格品であった。個人住宅は飲食店や民宿など限られていた。そんな中で鉄筋コンクリート 3 階建ては、M 建設会社社長の御殿だった。

島中に巨大なダムと発電所があり、島にありがちな水不足とは無縁だという。小中学校は鉄筋 2 階建て、立派な体育館は夜間には島民に開放されていた。児童生徒の数は 23 人。教職員は 13 人（1975）で全員食堂付の専用住宅住まい。この外にもナイター設備の整ったテニスとバレーボー

ルコートにプールも備えていた。

居候している都営住宅の沖村から、戦前は 80 戸で賑わったという北村へと向かった。乳房山（463m）、堺ヶ岳、石門山山腹を削って 12 kmの縦断道路の建設中で、落石防止やガードレール取り付け作業に舗装工事中であった。ところが、建設業関係者以外の車には 1 台の車にも会わなかった。途中、頭上には「土砂崩れ、落石注意」の表示、崖崩れ防止の金網は錆びて朽ち、道路はひび割れが生じていた。これでは、造っては壊れ、壊れては直して際限なく作業が続きそうな感じだった。もっとも、北港石油備蓄構想に備えての道路整備との話もあるようだ。

現在、北村に住むのは 2 家族のみであった。そのうちの 1 軒で雨宿りをさせてもらった。スイカをいただき、時間の経過とともに行政への不平不満にと変わっていた。沖村へは道路なんか使わず船で行く、北村への援助はなく電気も通してくれない、

沖村以外には住むなということだという。綿花からワタを取りながら戦前の賑わいを懐かしそうに話してくれた。当時の小学校跡は巨大なガジュマルが気根を地におろし、日中でもうす暗い荒地になってしまったという。とんでもなく長い雨宿りになってしまった。軒先から採ったバナナと、珍しい赤く硬い石をお土産にいただき腰を上げた時、母島のジャングルでは踏み跡以外には立ち入らないように注意された。戦時中の砲弾による大きな穴が草木で覆われおり、落ちると自力では脱出できない深さだと教えられた。

翌日、島の縦断を目指して南崎へと向かった。中ノ平までの 3 kmは幅 5mの舗装道路だった。電気のないプレハブが 1 棟、ヤギを飼育する小父さんが一人住んでいた。小笠原のヤギは、19 世紀初め食用として待ちこまれた。ところが、戦後アメリカ軍統治下から日本に返還された 1968 年以降、島が国立公園に指定（1972）され、完全に野放し状態になってしまったという。ヤギは草木を根まで食べつくすので表土が剥き出しになり、赤土が流れ出し、海を汚染するという。

畑の先はガジュマル、タコノキ、リュウゼツランやシダの仲間などのジャングルでわずかに踏み跡が残っている状態だった。ほぼ 1 時間で着いた南崎は美しい海岸だが、観光客が来るようなところではなかった。

【資料】（2021 年） 母島の人口 470 人、児童生徒数 44 名、教職員 27 名。

タコノキ

北村は無人となり、北港石油備蓄云々はパソコンで見える限りその後の動きはないようである

【参考】1970 年からヤギの駆除が始まった



お土産にいただいた赤石



<カメ食文化>

日本に於けるカメは海神の化身とされ、海の守り神である。同時に甲羅が小判と似ていることから金運に恵まれるとの言い伝えもある。中国では、カメは仙人であり長寿のシンボルである。カメは昔から縁起良い動物として重宝されてきた。ところが、ガラパゴスのゾウガメは航海者の貴重な蛋白源として狙われたし、南太平洋の島々や東南アジアのインドネシアやラオスなどでは、今日で

も食材となっている。

小笠原にもカメ肉を食べる風習が今も受け継がれていた。父島ではアオウミガメを孵化、放流、保護しつつ食べている。7月末から8月中旬にかけて滞在したが、スーパーの冷凍庫にはシチュー用の肉があったし、食堂でカメシチュー、カメステーキが食べられた。アオウミガメを食べるのは世界でも珍しい食文化だが、孤島の貴重な蛋白源として根付いているのだろう。

ステーキ用は赤身で、見た目は馬肉に似ており、クセもなく食べられた。カメ煮は島の伝統料理らしく、あらゆる部位の肉に内蔵も加わり、塩で煮込んでいた。脂の色は緑色っぽいが、交通信号機が赤、黄、緑なのに青と呼んでいるのと同じくアオウミガメとなったと聞いた。こちらは独特のクセがあったが、気になるほどではなかった。

小笠原諸島の歴史を見ると、最初の入植者は日本人ではなく、1830年に欧米人5名とハワイ人25名であった。居住しながら開拓し、後に太平洋を航海する捕鯨船にとって重要な補給基地となった。ウミガメは彼らの重要な食料だったことからするとカメ食文化はハワイ、ポリネシアから伝わった食文化と言えそうだ。

余談だが、島の食文化に「島寿司」があった。刺身を醤油漬けにしたものを酢飯にのせた寿司である。冷蔵庫のなかった時代の保存目的で生まれたものらしい。また、ワサビの入手が困難だったことからからしを使っていた。

【参考】アオウミガメは絶滅危惧種指定。現在でも年間135頭と限られ、漁期は3,4,5月のみ。小笠原の島から持ち出されることはないので島限定の食べものといえる



カメの小さな縫ぐるみ

＜発芽しなかったゴムの実＞

シンガポールからマレーシアに入った時、手入れの行き届いたゴム園に立ち寄った。初めて見る天然ゴムの樹液が白いのにゴム特有の匂いに驚いた。1週間ほど乾燥させるとゴム色になると教えてくれた。園内に落ちていた茶褐色のゴムノキ、パラゴム^(*)の実を3個もらってきた。

天然ゴムとヨーロッパ人との出会いは、15世紀末のコロンブスによる航海とされている。20世紀初め自動車産業発達と共にゴムの需要が急増した。1976年ウィツカムが、厳しい規制をすり抜けてアマゾン流域からゴムの実を持ち出した、いや盗み出した。

彼がイギリスに持ち込んだゴムノキの実7万個のうち僅か3%がロンドンの植物園で発芽した。1877年、1900本の苗木をセイロン経由でシンガポールに22本を移植。1900年にマレー半島でプランテーション農業によりアジアで初めて天然ゴムの生産に成功し、イギリスが世界のゴム市場を独占してしまう。

握りしめているゴムの実が、アマゾンからイギリス、セイロン、現在のスリランカ、シンガポールそしてマレーシアへと移動してきた種子の流れを受け継いだものかと思うと、何かわくわくするものを感じた。

ゴムノキの実はマレーシアの記念品として保管してきたが、小笠原でハイビスカスの花が咲き、バ



ナナヤパパイヤなど熱帯を代表する植物を見て、ひょっとしたらゴムノキの実が発芽するのではと思い、ゴムの実を2個母島に送った。結果を待ったが朗報は届かなかった。

(*) ゴムノキの幹に傷をつけて得られる乳液、ラテックスは、天然ゴムの原料。パラゴムはアマゾン川の河口パラ港から積み出される天然ゴムの呼称。モカ港から積み出されたコーヒーがモカコーヒーと呼ばれたのと同じ

＜ポンペイ島＞（旧称：ポナペ島）

カロリン諸島にあるミクロネシア連邦の一部で、グアムの東南東約 1,700 kmに位置している。ポンペイとはポンペイ語で「石積みの上に」の意味。1914～1945 年まで日本領で、特に 1930 年代に精糖事業やカツオ関連事業で多くの日本人が住んでいた。

緯度が北緯 6° 54' ということで、気温は年間を通して 27～28℃、一日の最低気温は 23℃、最高気温が 31℃。年間降水日数 304 日で世界 1 だという。火山島の周囲には堡礁(*)が発達している。南国特有の白い砂浜には恵まれていないが、島の南東部に世界遺産のナンマドール遺跡がある。ナンマドールは「神々と人間との間の空間」を意味し、古代大陸、ムー大陸の一部説や浦島太郎伝説も囁かれている。1,500m×600mの浅瀬に玄武岩で造られた 100 程の人工島群である。13 世紀頃に発達した王朝の遺跡説が有力視されているが、膨大な石の運搬方法など解らないことが多く、ミステリアスな遺跡とされている。

イースター島と並んで興味ある島で資料を集めていると、酒田で潜水関係の事業をされている方が島の長から日本の息子と呼ばれている間柄であること、更に、高校山岳部で1 学年下の歯科医師が島のホテルのオーナーであることも解った。埼玉県在住の歯科医師と連絡も取れ、とんとん拍子で進んでいた南洋の島旅だったが、コロナウィルス禍で頓挫してしまった。

(*) 堡礁 サンゴの発達具合で裾礁、堡礁、環礁と区別している。裾礁は陸地の沿岸に発達したサンゴ礁、堡礁は地盤沈下または海水面の上昇でサンゴ礁と中央の島の間に礁湖、ラグーンができた状態で、バリアリーフともいう。環礁は更に沈下が進み、島が完全に沈没してしまい周囲を囲んでいたサンゴ礁のみが海面に出ている状態で、アールトとも呼んでいる

2) メラネシア（黒い島々＝皮膚の黒い人々の住む島々）

ニューギニア島を含む経度 180 度より西、赤道より南の地域である。環太平洋造山帯に位置するため火山島が多い。ヤムイモやタロイモなど根菜類を主食とする農耕文化が見られる。パプアニューギニア、フィジー、ソロモン諸島、バヌアツの独立国の他にフランス領ニューカレドニアなどを含む。なお、ニューギニア島は、行政的には東半分はパプアニューギニアでオセアニア、西半分はインドネシアでアジアに入るが、先住民族の文化は共通なのでニューギニア島全体をメラネシアとした。

3) ポリネシア（多くの島々）

ポリネシアの人々の祖先は 3,000 年～4,000 年前、アジアからタヒチ周辺のマルケサス諸島に渡り、さらに各地へと広がったとされている。彼らのカヌーは丸太をくり抜いた丸木舟だが、片方にバランスを保つための腕木、アウトリガーを取り付けるなどカヌーをつくる術に優れ、航海術に長けていた。かなり広範囲に島々を移動し住みついたところがポリネシアとされている。具体的に

はハワイ諸島、ニュージーランドとイースター島、現地名はラパヌイ島を結んだ三角形、ポリネシアン トライアングルの中にある島々の総称である。ニュージーランド、サモア、ツバル、トンガ、クック諸島、ニウエの独立国の他に、アメリカ、イギリス、フランス、オーストラリア、ニュージーランド領となっている島々が含まれる。

＜南太平洋の島々が抱える問題＞

近年、世界各地で異常気象が頻繁に報告されるようになった。その1つに地球温暖化の影響で氷河や南極などの氷の融解、海水温の上昇により海水が熱膨張による海面水位が上昇している。南太平洋の島々はサンゴ礁が隆起してできた島が多く、海拔高度が低い。ツバルの平均海拔は 2m、国土の最大海拔は 5mである。キリバスと共に海水の浸食で陸地が減少し、経済基盤のヤシの木が倒れ、満潮時には地面から水が湧き上がり冠水するなどの深刻な影響が出始めている。

温暖化の原因の一つとされる二酸化炭素排出量ランキング^(*)を見ると、キリバスは例年 190 位代で何処の国よりも少ない。しかし気候変動の影響を真っ先に受けて国家存亡の危機に直面しているのである。

これら南太平洋の島々、国家は日本人にとって馴染み薄い。しかし、日本で消費するマグロやカツオの多くをこの水域での水揚げだし、オーストラリアからの鉄鉱石、石炭や液化天然ガスなどの海上輸送路となっており、重要な地域といえる。

(*) 二酸化炭素排出量ランキング (2022)

①中国 29.7% ②アメリカ 13.3% ③インド 7.2% ④ロシア 5.5% ⑤日本 2.6%

＜ポリネシアのイースター島＞

広い太平洋に散らばる島々は、ポリネシア、メラネシア、ミクロネシアに分けられる。イースター島はハワイ、イースター島、ニュージーランドを頂点とするポリネシア トライアングルの東端に位置している。海底噴火による島で、最も近くの人々の住む島、ピトケアン諸島の南東 2,000 km、チリのサンチャゴの西へ 3,760 km、タヒチから 4,050 kmも離れた南海の孤島である。

この地にどこから、どのようにして人々が渡ってきたのかは解明されていない。1947 年、ノルウェーの人類学者トール ハイエルダールがペルーからの仮説を立て、6人で筏のような原始的な舟、コンティキ号漂流を始め、101 日後にタヒチのあるトゥアモトゥ、ツアモツ諸島の環礁にたどり着いた。しかし、その後の調査でイースター島へはタヒチ島の北東 1,500 kmのマルキーズ、マルケサス諸島から渡ってきて暮らし始めたというのが定説になっている。

イースター島は 3つの名称を持つ。イースター島、同じ意味のスペイン語でイスラ デ パスクア、地元民はラパ ヌイで、大きな石斧の意味である。島は 3つの死火山を頂点とする三角形で、周囲 58 km、最高地点はテレ バカの海拔 540m である。土壌は溶岩性で樹木に乏しく、なだらかな起伏を芝草が覆っているが、1本の小川もなく飲料水は火口湖ラノ カウから導水している。気候的には南半球の温帯北限で、年平均気温 22℃、年間降水量は 1,270 mmで過ごし易い。10 世紀頃を中心に造られたとされるモアイが島全体に分布しており、その数 1,000 体ほど発見されている。

＜夕刻に映えるモアイ像＞

大きな頭部、寸胴に加えて膨らんだ腹部のユーモラスな石像、尖がった頭とは対照的に遅しく張った顎で瞑想的な姿に心惹かれるものがあった。少なからず心を弾ませてのイースター島入りだったが、空港での客引きの喧騒さ、なかでも日本語のガイドブックを手にして、宿泊料を客に言わせている大柄の男に興ざめだった。大声に加えて身振り手振りの宿泊案内カウンター反対側に、目立たない公の宿泊案内カウンターがあった。穏やかな口調での受け答えに心が和んだ。そして、バンガロア街の案内所を示した地図まで渡してくれた。



夕方、空が穏やかな色に染まり始めた。海辺の踏み跡は三々五々タハイに向う人々の列ができた。タハイは集落から簡単に行ける遺跡で、広々とした芝生の先に愛くるしいモアイが5体、直ぐ近くにもう2体建っていた。薄いピンクから黄金色へと変わる空をバックに黒いモアイとその手前にモアイを眺める人々の影法師があった。

＜無残なモアイ＞

翌日、島の南の海岸沿いのパイフに足を運んだ。モアイが建っているはずの祭壇がそっちこちに残っていたが、全てのモアイは顔を下にして息を止められているかのように倒れているもの、顔を上にしても胴体より低くして折り重なり、無残な姿をさらしていた。海辺ということもあり、顔といい、背中といい侵食が進み、石のイメージからは程遠い残骸であった。

16世紀から18世紀にかけての内戦で勝者が敗者のモアイを破壊したとされているが、石そのものが信仰対象としたもの同士の仕業なのかと疑いたくなった。ざらざらに風化したモアイの中には、目の跡が無く盲目のものもあった。祭壇に建って初めて目が入れたというから、折角、海岸まで運ばれながら祭壇に立つこともなかった不運なモアイということになる。



石の持つ永遠性、不動、堅固、超越性などから巨石を、古今東西で信仰の対象としてきた。それだけに、倒され、重なり合い、数百年経ても大地にも帰れずにもがき苦しんでいる様子は異様だった。布の人形でも持主の精霊が移るとされる民族には想像を超える悲惨な光景であった。

＜躍動するモアイ＞

タハイが夕刻に映える遺跡なら、トンガリキは日の出に輝くところだった。4時過ぎレンタカーで宿を出てトンガリキを目指した。村を過ぎると民家は一軒もない。平坦な火山島ということで1本の河川もない。人にも車にも出くわさないが、馬が要注意であった。時折路上に群れ、クラクションにも動じない。またある時は集団で路上に飛び出てくるという。

モアイ切出し場所のライ ララク山の右肩におぼろ月が出ていたが、暗い静寂が40分間ばかり支

配した。微かな明るさが空を染め始めると、俄かに忙しくなった。空の色は一時も静止することなく、黒雲から淡い紫へ、そしてピンクから黄金色へと変化した。空の色彩に合わせて巨石像もゆっくりと躍動し始めた。まばゆく力強い陽光で縁取りされ、微かな黄金色に染まった 15 の巨石像は呼吸し、微笑んでいた。腹部のふくらみも、でか過ぎる頭部も、胴の両側に張り付いた両手も日本人に馴染み深い七福神と同じような親しみを覚えた。全長 200m にも及ぶ祭壇に整然と建っているモアイ群は、見る人誰しもが思わず驚嘆の声を上げてしまう見事なものだった。

1960 年のチリ地震による津波は、海岸線から 600m 内陸まで押寄せたという。ここトンガリキ遺跡は、倒壊していたモアイ群を津波が洗うという壊滅的な打撃を受けた。見かねた日本のクレーン会社がボランティアで復元したのだという。アフと呼ばれる祭壇の端に遠慮がちに復元様子を伝える記念碑が建っていた。



【資料】モアイの復元、修復 1988 年秋、テレビの「世界 ふしぎ発見！」でイースター島を特集した。これを見ていた香川県高松市に本社を構えるタダノが、ボランティアで 1992 年にクレーンを島に持ち込、島南部のアフ トンガリキにある 15 体を復元、修復してクレーンを島に寄贈した

<モアイの謎>

人影のない草原の斜面をゆっくりとライ ララク山へ向かった。足元のモアイ達は右に左に傾きあるいは直立しながら大地に身を沈めていた。朝日を浴び長い影を伸ばすモアイの顔には表情があった。黙して語らないが何かを問いかけている尊大さを漂わせていた。

9:30 過ぎ、管理人が 1 匹のイヌと現れた。乱立するモアイの上方がモアイ切出し場所で、そこから伸びる窪地がモアイを運搬した跡だとい



う。モアイの不釣り合いに大きな顎も丸みを帯びた腹部も運搬に役立ったことを、言葉に不自由しながらも語ってくれた。

モアイ製作の最盛期は、島の人口が最も多かった 10 世紀頃とされている。造りかけ途上で放置されたモアイの側に、黒曜石^(*)のつるはしや斧が放置されていたという。石器による4～5mの巨大な石像造りには、どれ位の時間を要したのだろうか。島全体に散らばるモアイの数は 1,000 体に近い。なぜこうも多くの石造を造ったのか。そして、数 10 トンもの巨像をどのように運び、祭壇に建てたのだろうか。そもそも絶海の孤島に彼らは何処から来たのだろうか。全てが謎のままであるが、手がかりが全くないわけではない。イースター島が外部世界に発見されてから 140 年も顧みられなかったロンゴ ロンゴ文字の板が残っている。1770 年、島の合併を宣言書に島民の 1 人がこの文字でサインしたことが知られている。イースター島はポリネシアで固有の文字をもった唯一の島なのである。しかし、今日ではその文字を読める人は誰もいない。

島の言い伝えによると、長耳族と短耳族との間で争いがあり、モアイを倒しあう悲劇があったという。でも、島にとってもっともひどい外敵は航海者たちによる残虐行為であった。なかでも、



ロンゴロン文字のテーブルセンター

まで体を左右にゆすりながら歩いていったという。そして、彼等が鎮座し見つめる方向は望郷の念に駆られ故郷であると思えてくる。

(*) 黒曜石 火山岩の一種。石基はガラス質で鋳物の硬度（モース硬度）は 5 と硬い。石器時代には石器の素材として利用。金属器を持たない民にとっては重要な資源。南米では 15 世紀まで使用された

1862 年の奴隷狩りで 3,000～4,000 人の人口が 111 人に減り、辛うじて帰島した 15 人が天然痘と結核をもち帰ったのである。その結果、連綿と継承されてきた島文化が途切れ、ロンゴ ロンゴも過去の文字として封印されてしまった。

モアイの瞑想的で神秘的表情からすると、モアイ切り出し場に 1 人の巫女が住んでいたという伝説を信じたくなる。彫りあがったモアイに生命を吹き込むのが彼女の役目で、超自然の靈力が宿ったモアイは、足がなくともアフ、祭壇